

理解されないイエス

マルコによる福音書三章19〜35節

身内の人たちはイエスのことを聞いて、取り押さえに来た。「気が変になっていいる」と思ったからである。(21)

主イエスの目覚ましい働きに対して、身内の人たちが来てその働きを止めようとしてきました。彼らは主イエスが気が変になったと思つて連れ戻しに来たのです。気が変になったと考へたのは、主イエスの働きが常軌を逸していると思へるほどに熱烈だったからでしょう。確かに主イエスは人々のために、寢食を忘れるほどに徹底して奉仕されました。人々に対する主の愛は、世間の常識からすればあまりに度を過ぎていたということでしょう。人々は一般に、このように徹底することを好みません。処世術から言えば、中庸こそ大切であると言へるでしょう。しかし、信仰の世界においては、「ほどほどに」という処世術的な声に気をつけなければなりません。神の愛は「ほどほどに」ではなく、命を懸けたものだったからです。この命をかけた愛が、私たちを主への奉仕へと駆り立てるのです。